

中学校音楽科における教材としてのオペラ

杉町玲子¹⁾

渡部成哉²⁾

¹⁾千葉大学大学院・教育学研究科

²⁾千葉大学・教育学部

Opera as instruction for the junior high school music department

SUGIMACHI Reiko¹⁾ WATANABE Seiya²⁾

¹⁾The United Graduate student, Chiba University, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

中学校音楽科の授業、あるいは学内行事として行われる合唱活動を通し中学生に芽生えた歌唱への関心、それを生涯にわたって持続させ、また発展させていくための教材として、オペラの可能性に着目したのが本研究である。昭和23年以降の教科書にはさまざまなオペラが取り上げられており、現在使用されている2社の教科書で扱われるオペラ作品は「アイダ」である。中学生の興味や関心をより高めるためには、「アイダ」のような悲劇的な内容よりも、喜劇的要素を持つオペラが適しているのではないかという仮定のうえ授業を行ってきた。また中学生に実施したアンケートからも同様の仮説が生じた。中学生にとって、オペラはイメージが曖昧である一方、タイトルや部分的な旋律に限れば身近なものでもある。本研究は、教科書に取り上げられたオペラ作品、アンケートの結果、また指導経験などの検証から、中学生の教材に相応しいオペラ作品とは何かを探ったものである。

キーワード：中学校音楽科 (Junior high school music department) 教材 (instruction) 鑑賞 (appreciation)
オペラ (opera)

はじめに

中学校の音楽科授業において、歌唱活動は大きな位置を占める。

校内のさまざまな行事において合唱が使われ、そのための歌唱指導も音楽科の授業内で盛んに行われているからである。その意味では、合唱を抜きにしては中学校音楽科の授業は成立しないといっても過言ではない。合唱をきっかけとして生徒が歌唱に関心を深めていくことも、しばしば観察されるところである。にもかかわらず、そのようにして育まれた歌唱への関心も、学校を卒業するとともに、次第に薄れていってしまうように見受けられるのもまた事実である。

本研究は、中学校音楽科において培われた歌唱への関心を、生涯にわたって持続させ、また展開させていくため、オペラを教材として授業を行った記録であり、また今後の展望を拓くためのものでもある。

中学生にとってオペラは、漠然とした知識はあり、曖昧なイメージを抱いていたりするものの、その知識に偏りがあったり、曖昧ゆえに、その入口ともいべき部分で興味を足踏みさせている状態であり、そのことは後述するアンケートからも窺える。

オペラは、単に音楽だけではなく、元となる台本、小道具・大道具から衣装、照明を含む舞台の色彩や形、人間の身体の動きなど、多岐にわたる芸術分野に触れる事のできる「総合芸術」である。多岐にわたっているからこそ、個々の生徒が興味を抱く対象もまた多様なものとなりうる可能性があるだろう。

興味を抱くきっかけや対象はそれぞれ違っても、オペラの魅力をいろいろな角度から知ること、多様に絡み合う芸術表現の諸要素におのずと触れ、生涯を通じて芸術との豊かな出会いを深め、また持続させていく契機にもなりうることを確信するものである。

1. オペラ指導の経緯

杉町がオペラ作品の教材としての可能性について深く考えるようになったのは、中学校学習指導要領(平成10年12月)中に共通教材が示されなくなってからである。

それ以前において、教科書に示されていたオペラ作品は、『『アイダ』から第2幕 第2場』であり、鑑賞教材としてであった。しかしながら、「アイダ」を扱った鑑賞の授業では、グランド・オペラならではのスケール感や、歌手たちの豊かな声量に「すごい」という印象を持つ生徒が多数見られる反面、その感想は一過性のものであり、授業が終わってしまえば、生徒の心や記憶にオペラが残るというようなことは観察されなかった。

「アイダ」はヴェルディの最高傑作のひとつであり、むしろ中学生にもその素晴らしさは伝わるはずである。しかし、中学生にとっては非日常の一方の極ともいえるオペラで、初めて鑑賞し体験する作品が「アイダ」では、オペラの持つ非日常性をより際立たせ、オペラとの乖離感をより強調してしまう結果に終るのではなからうか。

身近に感じられ、「オペラへの親しみ」を沸き立たせるような教材による授業はできないだろうか。そう思い続けてきた杉町の教員生活9年目に、前述のように共通教材の枠が消えた。ならば、中学生にいかなるオペラ作

品を教えればよいか独自に考える必要が生じ、その後の授業の中で実践を重ねてきた。そうした実践経験をもとに、研究をより深化させるべく、現職教員のまま教育学研究科に進み、渡部研究室においてこのテーマに取り組むことになったわけである。

2. これまでのオペラ作品の指導経験

杉町がこれまで教材として扱ったオペラ作品は「セヴィリアの理髪師」(G. ロッシーニ)、「フィガロの結婚」(W. A. モーツァルト)、「椿姫」(G. ヴェルディ)の3作品である。

「セヴィリアの理髪師」は中学校3年生の教材として扱い、他の2作品は中学校3年生の選択教科の教材とした。

「セヴィリアの理髪師」については、生徒がオペラを身近に感じるような作品とは何か、あるいは限られた授業時間の中でどの程度まで鑑賞することが可能かなど、多くの作品や資料、映像を検討した結果、以下のような理由で選択したわけである。

- ・オペラ・ブッファであり、芝居や音楽がコミカルで深刻さとは無縁なため、オペラに入りやすく、親しみが抱きやすいのではないかとということ
- ・物語や登場人物が比較的簡単で、わかりやすいこと
- ・ロジーナをはじめ、伯爵やフィガロのアリアなど、生徒に聴かせる箇所が十分にあること(当時使用していた教科書には「オペラの名曲を聴こう」と題し、フィガロによる「私は町の何でも屋」のアリアが掲載されていた)
- ・レチタティーヴォ、アリア、重唱、合唱と、さまざまな声楽のスタイルが含まれていること
- ・軽快な序曲、多用されるロッシーニ・クレッシェンドなどは、アップ・テンポの曲、あるいは音量の幅の大きい音楽を好む傾向にある現代の生徒の趣味や嗜好にも合うのではないかと考えたこと
- ・序曲から第1幕第1場までの演奏時間が50分程度で、授業の単位時間に収まるものだったこと

一方、「フィガロの結婚」、「椿姫」については、「セヴィリアの理髪師」でオペラへの関心を高めた生徒に対し、選択教科としての音楽の授業の中で扱ったものである。

「フィガロの結婚」は全幕の鑑賞をした。

鑑賞後の授業においては、ケルビーノのアリア(「恋とはどんなものかしら」と俗称される曲)を歌唱教材として取り入れ、「手紙の二重唱」のアンサンブルには芝居を付けて挑戦させた。生徒たちはカタカナでルビがふられた原語(イタリア語)の楽譜を片手に懸命に取り組み、複数の映像資料を見比べたりしながら、熱心に練習に励んでいた。

「椿姫」は、中学生が演奏することに関しては技術的な問題もあり、鑑賞のみにとどめることとして、全曲を鑑賞させた。1回の授業で1幕というペースの鑑賞にもかかわらず、生徒の印象に残る作品となったようである。

オペラ作品を教材として取り上げるのにあたり杉町は、「できるかぎり作品のすべてを鑑賞させ」、「それができない場合でも、コマ切れの鑑賞はさせない」ということ、また「鑑賞だけにとどまらず、オペラ作品への興味を歌唱活動、表現活動にも広げる」という方針をできるかぎり堅持したいと考えた。

3. 作品のすべてを鑑賞させるということ

しかしながら、オペラ作品の全体を鑑賞させるためには、相当の時間を要する。

舞台の鑑賞ならともかく、映像のみの鑑賞を2時間近く続けることは物理的に困難であり、また年間35時間に設定された授業の指導計画上も難しい。鑑賞に数時間を費やし、その鑑賞の前後には作品について学習する時間も必要であることを考えあわせると、現実面での困難が生じる。ならば、せめてオペラ作品のひとつの幕や、あるいはひとつの場を省略せずに見せる形の鑑賞にしようと考えた。

当時使用していた教科書には、『アイダ』から第2幕第2場の鑑賞ではなく、「オペラの名曲」として、いろいろなオペラの中のアリアや合唱曲が紹介されていた。また、「蝶々夫人」の「ある晴れた日に」が共通教材として示されていた時代もあった。このような鑑賞のしかたで、オペラの魅力が十分に伝わるはずはない。

冒頭に書いたごとく、オペラにはさまざまな魅力や要素が含まれる。序曲やアリア、また重唱などの音楽的な魅力に惹かれる生徒はもちろん、原作や台本の文学的魅力に共感する生徒、舞台美術や照明、衣装に魅了される生徒、舞踏が含まれる作品であれば、その躍動感に心を弾ませる生徒もいるであろう。音楽以外にも、さまざまな魅力と芸術表現への窓口を持っているからこそ、オペラを教材として扱う価値がある。アリアを抜き出して鑑賞させるだけでは、決して伝えられない要素があまりにも多いのだ。

また、鑑賞の際には、音声を別途収録した映画のような映像ではなく、生の舞台を記録した映像を使用することも心がけている。オペラ・ハウスの雰囲気、観客の拍手や掛け声、ブッファなどで起こる笑い声も含めて、自由な態度で鑑賞してよいのだということも伝えたい。

4. 鑑賞と表現の一体化

授業で鑑賞したオペラの印象を明瞭に残すためにも、その後の授業において当該のオペラ作品を扱う。

もちろんアリアを全員に歌わせるがごときものではなく、作品中の親しみやすい旋律を授業前の発声練習に用いたり、歌唱法の参考のために部分的に繰り返して鑑賞したりと、作品を生徒の表現活動の中で展開するよう心がけている。

生徒たちが中学校を卒業した後、授業で鑑賞したオペラ作品の題名を目にしたり、あるいは旋律を耳にした時など、かつての印象や感動が再びよみがえり、改めてそれらのオペラに触れるようになれば、と考えてのことである。

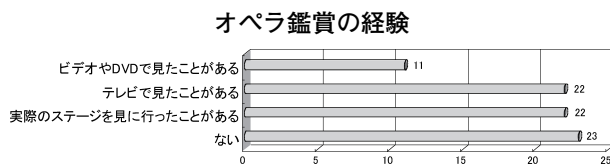
5. 中学生のオペラについての意識調査

中学生にとってのオペラに対するイメージや知識を調べるべく、東京都台東区立柏葉中学校3学年64名を対象に、2006年6月にアンケートを実施した。

質問紙による質問事項は以下の4つである。

- ・「オペラの鑑賞体験の有無」について
- ・「オペラに関する認知度、イメージ」について
- ・「鑑賞してみたいオペラ」について
- ・「知っているオペラ作品」について

「オペラの鑑賞体験の有無」について得られたデータを以下に示す。

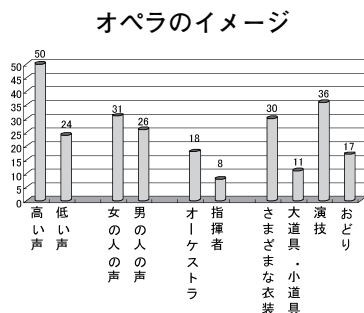


オペラの学習に入る前の調査であり、この場合のオペラとはどのようなものなのかという定義（演奏形態についていえば、「全曲」か「抜粋」か、装置や衣裳を伴うものか、コンサート形式のものか、など）が明確でない生徒もあった。しかし、生徒自身の「オペラを見たこと、聴いたことがある」という認識を尊重し、定義や概念には触れずに回答させたものである。

柏葉中学校の近隣の小学校では、オーケストラやオペラ、またオペレッタなどの鑑賞教室が行われているため、そうした中での鑑賞経験も多いと思われる。同じく近くには東京文化会館や東京藝術大学があり、チケットを買って鑑賞したという生徒も数人いた。

オペラ鑑賞の経験がないと答えた生徒が3分の1近くあり、ここには自分の鑑賞したステージがオペラだったのかどうか「よくわからない」という生徒が含まれる。いずれにしても、オペラ鑑賞の経験は「なんとなくあった」という程度の生徒が多かったというのが、この問いに対する回答の結果である。

「オペラに関する認知度、イメージ」については、下記のグラフに示した語句の中から、生徒が「オペラ」としてイメージするものがあるならば選択させた（複数回答可）。結果は下のとおりである。質問紙には、挙げられた語句以外のイメージがあれば自由記述させる、という項目も設けた。



「高い声」、「低い声」については、「高い声」を選択した生徒が、「低い声」を選択した生徒を圧倒的に上回り、2倍の数値を示した。

「女の人の声」、「男の人の声」に関しては、「女（の人の）声」が多いと予想したが、両者の差はあまり開いていない。アンケート実施前には、ソプラノの高音が鳴り響くようなイメージを抱いているのではないかと想像したのだが、近年は国内外のテノール歌手が多く活躍していることもあり、女声・男声に有意な差が見られなかった。

ただし、「低い声」よりはテノールやソプラノのハイトーンのイメージが強いということは前出のとおりである。

「オーケストラ」および「指揮者」に関しては、声楽以外の要素をどれだけ認識しているかを調査するために設定した語句である。これらを選択した生徒は全体の3分の1以下であり、そのほとんどが、ジュニア・オーケストラや吹奏楽などでの楽器演奏の経験がある生徒であった。

「さまざまな衣装」、「大道具・小道具」、「演技」、「おどり」についても、前項同様、声楽以外の要素をどの程度知っているかについて調査するために設定した語句である。

まず、「さまざまな衣装」については半数近くの生徒が○をつけている。

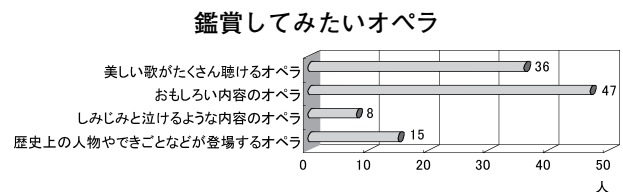
歌いながら「演技」をするというイメージも根強くあることがわかる。

一方、「おどり」を選んだ生徒は少なく、これはバレエなど舞踏が含まれるオペラを見たことがあるかどうかによるだろうし、仮に踊りの場面を見ていたとしても、それを意識し記憶しているかどうかにもよるだろう。

自由記述に書かれた事柄はさまざまである。特記すべきは、オペラのイメージを「暗い」と考える生徒がいる一方、「明るい」と考える生徒もいたことで、興味深い結果であった。

「鑑賞してみたいオペラ」については、「美しい歌がたくさん聴けるオペラ」以下の選択肢から選ぶ（複数選択可）という方法で調査した。

この結果を以下に示す。



「しみじみと泣けるような内容のオペラ」を選択した生徒が8人に対し、「おもしろい内容のオペラ」を選択した生徒が47人で、5倍以上の結果を得た。

生徒の興味に合わせたオペラ鑑賞は、オペラ・ブッファとオペラ・セリアのどちらがよいかの参考とするための選択肢であったが、この結果からだけで推察すれば、生徒の興味はオペラ・ブッファの領域にあると思われる、鑑賞作品の選択にあたってのひとつの指針となりうるだ

ろう。

「知っているオペラ作品」については、ホームページ「ドクターTの部屋 オペラの部屋」(<http://tc5810.fc2web.com/operanen>)を参考に、1984年から2005年までの期間に日本国内で上演されたオペラ演目上位の20位のうち16作品を挙げ、それらの作品名について、単に題名を聞いたことがあるという程度であっても「知っている」として選択させる（複数選択可）という方法で調査した。

生徒の中で知名度の高かったオペラ作品は、選択数が多かった順に、

「カルメン」(43人)
「ヘンゼルとグレーテル」(35人)
「アイーダ」(21人)
「椿姫」(17人)
「フィガロの結婚」(16人)
「トゥーランドット」(16人)
「蝶々夫人」(15人)
「魔笛」(14人)
「セビリアの理髪師」(10人)

という結果であった。

ちなみに、上演回数の順では「魔笛」→「フィガロの結婚」→「カルメン」→「椿姫」となっており、上演回数の多いオペラが「知っているオペラ作品」ではないことがわかる。生徒の現状からすれば、オペラ全体についての知識はあまりないものの、序曲や前奏曲、あるいはあらすじ程度は知っているという作品が多いのだと思われるが、大半の生徒がこれらのオペラ作品を「知っている」と回答していることから、中学生にとってオペラの存在は比較的身近にある、ということが察せられた。

6. 過去の教科書におけるオペラ作品

平成17年度文部科学省検定になる教科書で扱われるオペラ作品は、教科書会社2社共に「アイーダ」が中心である。『『アイーダ』から第2幕第2場』は、平成元年の学習指導要領でも共通教材として示されており、その前後に出版された教科書にも取り上げられている。また、『『ある晴れた日に』(歌劇『おちょう夫人』から)』、『『かりうどの合唱』(歌劇『魔弾の射手』から)』も、過去に共通教材として示された曲である。

共通教材として示された作品以外にも、教科書に掲載されたことのあるオペラ作品は多数あり、昭和23年から今日までに使用されてきた教科書を可能な限り調査したところ、以下の作品が取り上げられていることがわかった。

作曲家および作品の呼称については、年代や教科書により若干の違いが見られるため、教科書に印刷されたままの表記とした。

また、これらの中には扱い方（歌唱教材、鑑賞教材、あるいはその双方のための教材、など）がはっきりと指示されていないものも含まれるため、作品名を列挙するにとどめる。

グルック	「アウリスのイフィゲニア」、 「オルフェオとエウリディー チェ」
ヘンデル	「セルセ」
W. A. モーツァルト	「フィガロの結婚」、「魔笛」
ベートーヴェン	「フィデリオ」
ロッシーニ	「セビリアの理髪師」、「ウィ リアム・テル」
ヴェルディ	「アイーダ」、「リゴレット」 「椿姫」、「オテロ」、「トロバ トーレ」
ドニゼッティ	「ランメルムーアのルチア」
プッチーニ	「おちょう夫人」、「ラ・ボ エーム」
ヴォルフ・フェラーリ	「聖母の宝石」
ウェーバー	「魔弾の射手」、「オベロン」
スッペ	「軽騎兵」、「詩人と農夫」
オッフェンバック	「天国と地獄」、「ホフマン物 語」
ワーグナー	「タンホイザー」、「ローエン グリン」
フンパーディンク	「ヘンゼルとグレーテル」
ビゼー	「カルメン」
ムソルグスキー	「ボリス・ゴドノフ」
團 伊玖磨	「夕鶴」

前述したごとく、上記の作品の取り上げられ方は、あるいは歌唱曲として、あるいは鑑賞曲としてとさまざまであり、鑑賞の場合でも、アリアや序曲などの部分的な鑑賞と、ひとつの場面や幕全体を聴かせるという扱いもあった。

こうした取り上げられ方を、以下の4つの型にまとめてみる。

- ・耳慣れた、あるいは親しみやすいオペラの旋律を歌唱する
- ・耳慣れた、あるいは親しみやすい旋律を持つ曲やアリアを鑑賞する
- ・オペラの成立や作曲家についてなど、音楽史の観点から作品を鑑賞する
- ・オペラ全体に触れることで、音楽と他の芸術との関わりを感じさせる

オペラを鑑賞教材として扱う際、「一つのオペラをじっくり鑑賞させる」か、あるいは「多くの時代や国、あるいは作曲家のオペラを幅広く鑑賞させる」のかという二者択一は常に迫られる点だろう。

総合芸術という観点からオペラを学習させるには、「一つのオペラをじっくり鑑賞させる」必要性があることは繰り返し書いてきた。

あれもこれもと幅広く鑑賞させる指導のプラス面を認めたとしても、やはり音楽を細切れにしている感拭えないし、アリアや重唱それ自体に至る舞台の高揚感を体験させることができないと思われるからである。

作品を一つに絞ることになれば、生徒の実態、興味や

関心のありかを見据えた十分な配慮が必要であり、わが国におけるオペラの上演状況も視野に置く必要があるだろう。また、原作や台本の把握、鑑賞させるDVDなどの映像資料、CDなどの音源についても、最良のものを選び出さなければならない。

7. 曲目選択の基準となる考え方

オペラ作品を教材として扱う場合には、数多くのオペラ作品から、生徒の実態や発達段階にあわせた選択が必要であろう。

教材としてオペラ作品を選択する際、考慮すべきこととして、以下のような点が挙げられる。

① 総合芸術として、多様な芸術分野に触れる事ができる作品であること

音楽の美しさにとどまらず、台本のおもしろさや芝居としての魅力も感じさせることのできる作品を選ばなくてはならない。

さらに、舞台装置や衣裳の絢爛さ、重厚さ、あるいは簡素さなどに加え、バレエなど舞踊の場面が含まれる作品であればなお望ましい。

このうち、紙数を割いて考慮したいのはオペラの物語や状況設定についてである。

歌詞にとどまらず、原作や台本に描かれた物語全体にも触れる必要があるので、中学生が学習するのに相応しい内容とは何かについて考慮してみる必要がある。

しかし、オペラ作品の中には、ヒロインが高級娼婦であるもの（「椿姫」）、封建領主の初夜権を扱ったもの（「フィガロの結婚」）、官能的な場面の描かれるもの（「タンホイザー」）などがひしめいている。殺人や自殺を扱うもの（「カルメン」、「リゴレット」、「蝶々夫人」など）も多い。

かつて渡部は、静岡県浜松市内の全小中学校を回る「オペラ巡回教室」の音楽監督として、出演する歌手たちの指導にあたっていた時期がある。中学校で上演する演目は「カルメン」であった。

周知のとおり、「カルメン」は、ホセがカルメンを殺す（刺殺する）場面で幕切れとなる。大阪の小学校において児童が殺傷されるという不幸な事件の発生したその年、芝居とはいえ、また小道具の偽の刃物とはいえ、学校内の体育館において人を刺し殺すという設定のオペラを演ずるのはいかがなものか、という議論がスタッフ、キャストの間で交わされたことがあった。

その結果と対処法、そこへ至る議論の道筋を詳述することは本稿の主旨ではないから省くが、結論だけ簡潔に述べれば、「カルメン」の結末を知っている生徒、またはいずれ結末を知ることになる生徒に対して、クライマックスに至りながらカルメンの刺殺場面を省いて見せることには意味がなく、なにより「ほんもの」でないものを提示してはならない、ということであった。

ネガティブなものをひたすら避けて通るだけでは、オペラ教材の選択の幅を非常に狭めてしまう結果になる。また、生徒がオペラへの関心を深めていく過程では、それらの作品に遭遇するのは不可避のことだろう。これは歌舞伎の場合も同様である。

「椿姫」や「フィガロの結婚」を扱った授業を杉町が行った際にも、過度にわたらない程度に全ての物語と状況設定をふまえた上で授業を進めた。生徒はそうした状況設定や物語の展開を含め、作品の面白さや奥深さを感じることができたようである。

② 「おもしろい内容のオペラ」を取り上げてみる

アンケート結果を参考に、悲劇的な内容のオペラではなく、オペラ・ブッフアの全曲、あるいはひとつの幕、ひとつの場面を選択してみてもはどうだろうか。

ちなみに、オペラ・セリアを能に、オペラ・ブッフアを狂言になぞらえる説明があるが、その発生の議論はさておき、現状の把握としてはいかがなものと思われる。オペラ・ブッフアを選ぶのは、能より狂言の方が入りやすいだろう、というような意味ではないことを付記しておく。

③ 作品の鑑賞時間を考慮すること

授業時間50分の中で鑑賞が可能な作品を探る。

全曲が50分で終わるようなオペラ作品は、1幕ものなどを除けば限られているので、幕や場ごとの時間が適当なもの、あるいは番号オペラのように音楽や場面の区切りがつけやすいものを選んでみる。

④ 国内において鑑賞が容易な作品であること

いかに優れた作品であっても、ここに挙げる条件を十二分に満たすものであったとしても、めったに上演されることのない作品や、映像・音源の入手が困難であるもの（または販売されていないもの）では意味をなさない。

その意味では、日本国内においても舞台を目にすることができ作品を選択したい。生徒がその生涯の中で、何らかのきっかけで再びオペラ作品と出会う機会があれば、授業で鑑賞した際の記憶や感動をよみがえらせることができるであろう。

⑤ 歌唱への興味を広げられるような作品であること

オペラ作品を教材として扱うことには、中学校音楽科で培った歌唱への関心を生涯にわたって維持させ、展開させていくための基盤をつくらうという目標も含まれる。

したがって、オペラの魅力を知るとともに、歌唱芸術の素晴らしさや表現力の可能性を感じさせ、生徒自らの表現活動へとつなげるきっかけとなるような要素を含む作品を選択しなければならない。

以上の点を勘案しつつ、次の6作品を選び出してみた。

W. A. モーツァルト	「魔笛」
W. A. モーツァルト	「フィガロの結婚」
G. ビゼー	「カルメン」
G. ロッシーニ	「セヴィリアの理髪師」
G. プッチーニ	「ラ・ボエーム」
E. フンパーディンク	「ヘンゼルとグレーテル」

8. 選択したオペラ作品の教材としての可能性の検証

以下は、前項で選択した6つのオペラ作品の教材とし

ての可能性, また予想される問題点を検証するものである。

なお、演奏時間は、「最新名曲解説全集」第18～20巻（音楽之友社編、1980）の記述を参考にした。言うまでもなく、演奏時間というものは相対的なものであり、使用される楽譜の版によっても違い、演出によっても違い、また演奏そのものの速度設定によっても大きな違いが生ずる。版の相違がなく、4幕もののオペラとしては比較的短い「ラ・ボエーム」を例にとつてさえ、最も速い演奏が100分を切るのに対し、ゆったりしたものでは120分＝2時間に近い演奏もある。したがって、あくまでも目安というにとどまる。

① 「魔笛」(W. A. モーツァルト作曲)

1984年から2005年までの日本国内での上演記録では、この「魔笛」が一番多く上演されている。題名やアリアの旋律を聴いたことがあるという生徒も少なくない。

演奏時間は、序曲約7分、第1幕約60分、第2幕約70分、合計2時間17分である。

番号オペラなので、場面を区切って取り上げることが可能である。登場人物が多く、全体としては物語もいささか複雑だが、キャラクターによる声域の使い分けや特徴的な旋律など、歌唱表現の多彩さを感じさせることができる。

全曲の鑑賞が難しければ、序曲から第1幕第8場までを鑑賞させる。

部分的な鑑賞といえども、物語の全体について触れることは必要である。しかし、この場面までの登場人物はタミーノ、三人の侍女、パパゲーノ、夜の女王だけであり、台本の流れもつかみやすさだろう。

序曲のオーケストラや、三人の侍女による女声アンサンブルの響き、テノール、バリトンによるそれぞれのアリア、夜の女王のコラトウーラ・ソプラノの響きなど、多様な声の魅力や音楽のスタイルに触れることができ、演出次第では、さまざまな舞台の仕掛けを堪能することもできる。

鑑賞授業の後には、夜の女王のアリア（のメリスマ部分）を用いた母音唱による発声練習や、パパゲーノのアリアを部分的に歌唱する。

② 「フィガロの結婚」(W. A. モーツァルト作曲)

1984年から2005年までの国内上演記録では、「魔笛」に次いで上演回数が第2位である。アリアの旋律など、CM等でも耳にすることが多く、これも生徒にとって親しみやすい作品に数えられよう。

演奏時間は、序曲と第1幕が約60分、第2幕が約50分、第3幕が約45分、第4幕が約45分、合計3時間20分と、鑑賞には長い時間を要する。ただ、幕ごとの鑑賞が可能であり、番号オペラゆえ、場面での区切りも容易である。

全曲の鑑賞が困難な場合、第2幕の鑑賞が適当であろうと思われる。

第2幕は、伯爵夫人によるソプラノのアリアから始まり、めまぐるしく状況が変わる中で、モーツァルトの素晴らしいアンサンブルの数々に触れることができる。ケルビーノとスザンナによる慌ただしい芝居をこなしながらの2重唱、伯爵夫人、スザンナ、わけても起伏の激しい感情の表現力が求められる伯爵との3重唱から、フィガロ、マルチェリーナ、バルトロ、バジリオが次々と加わる7重唱で締めくくられるフィナーレは、音楽表現の多様な魅力に満ちている。

登場人物の数や、その関係の把握がやや複雑に感じられる生徒もあろうが、キャラクターを明快に示す旋律や声の使われ方を聴き取ることで、歌唱芸術の奥深さを感じさせることができるだろう。

フランス革命に至る時代背景や衣装等にも注目させながら、オペラ・ブッフアのひとつの神髄に触れる鑑賞になると思われる。

鑑賞後の扱いは前出のとおり。

③ 「カルメン」(G. ビゼー作曲)

生徒のアンケートでは最も認知度の高かった作品であり、国内での上演回数も「魔笛」、「フィガロの結婚」に次いで3番目である。

内容はけっして明るいものではない。しかし、ストーリーの簡潔さも手伝って、生徒に訴えかける力があろうと考え選択した。

演奏時間は、第1幕が約50分、第2幕が約40分、第3幕が約35分、第4幕が約35分、合計2時間30分で、レチタティーヴォ版にせよ台詞版にせよ、基本的には番号オペラである。

全体の鑑賞が難しい場合、第4幕への前奏曲と第4幕全体の鑑賞が効果的であろう。

第4幕への前奏曲は管弦楽の演奏会でもしばしば取り上げられる曲で、聞き覚えのある生徒も多いと思われる。また、第4幕はこのオペラのクライマックス・シーンで、前出のカルメンの死に対する異論が予想されるが、男女の感情がぶつかりあうストレートな芝居の魅力や、最終場面へと音楽がひたすら盛り上がり、緊張を加えていくオペラ特有の醍醐味は、生徒の強い印象を引き出すものと予想される。

鑑賞後の授業では、「ハバネラ」の旋律を使い、発声練習や表現活動へとつなげる。

④ 「セヴィリアの理髪師」(G. ロッシーニ作曲)

国内での上演回数は17位ながら、小原論文（宇都宮大学教育学部研究紀要 第54号第1部「オペラ作品の教材化について—生涯教育を視野に入れた音楽科の教材論」）でも指摘されたように、このオペラは教科書に採用された楽曲（アリア）を含むという点や、オペラ・ブッフアの代表作のひとつであるという点からも、教材としての可能性を多く含んだ作品であろう。

この作品を取り上げた授業でも、生徒の反応はすこぶる良かった。

演奏時間は、第1幕が約90分、第2幕が約45分、合計2時間15分。この作品も番号オペラで、第1幕、第2幕とも、大まかにいって2つの場で構成されているので、場ごとの鑑賞も容易である。

杉町がこの作品を授業で扱った際には、やはり全曲を鑑賞させることが難しく、序曲から第1幕第1場までを鑑賞させた。

有名な序曲で管弦楽の響きを味わった後、冒頭の合唱やフィガロのアリア、伯爵のアリアなどでは、生徒も画面に見入っていた。

管弦楽、合唱、テノール、バリトンの各アリアが鑑賞できるとともに、オペラ・ブッフアの軽快な芝居の運びを存分に楽しめる。もともと女声の役が少ないことが難点であるが、オペラはソプラノが高音を歌うものとの印象を強く持っていた生徒にとっては、イメージの修正の機会にもなり、また男子生徒にとっては、男声による歌唱の魅力も多く味わえる時間であった。物語、登場人物とも、特に複雑な要素はなく、それだけ音楽や芝居に意識が向けやすかったと思われる。

フィオレロによる冒頭の歌を弱声の訓練に使ってみてはどうか。

⑤ 「ラ・ボエーム」(G. プッチーニ作曲)

国内での上演回数は11位である。

ミミの死により悲劇的に終わるが、第1幕、第4幕のそれぞれ前半に置かれたロドルフォやマルチェロたち4人(ないし5人)の男声による愉快なかけあいや、第2幕のカフェの描写など、陽気で活気があり、一方そうした場面とは対照的とも言えるロドルフォとミミの愛の旋律を鑑賞することで、映画のカットように展開の速いオペラの魅力を感じさせていくという指導が考えられるだろう。

また、登場人物それぞれに的確に割り振られたモティーフにも注目させたい。

アンケートでは、この作品を知っている生徒はいなかった。その意味では、まったく予備知識のない状態からスタートして、さまざまな発見をさせ、オペラへの関心を高めさせるという授業を試みたい作品である。

演奏時間は、第1幕が約40分、第2幕が約20分、第3幕が約25分、第4幕が約25分、合計1時間50分であり、単位時間が短いので、授業の中でも扱いやすいと思われる。

わけでも第1幕は、前述した4人(5人)の男声によるアンサンブル、ロドルフォやミミのアリアのほか、モティーフを巧みに織り交ぜた作曲手法や管弦楽の美しい響きなどを聴かせることができ、この幕を中心に、他の幕を部分的に鑑賞させるなどの指導計画が考えられるだろう。

⑥ 「ヘンゼルとグレーテル」(E. フンパーディンク作曲)

原作のグリム童話に何らかの形で親しんだ経験があるためか、アンケートでは多くの生徒が「知っている」と回答した作品である。絵本や活字やアニメーションなどで接してきた作品が、オペラとして表現されている様子や、ヴァーグナーばりのライト・モティーフにも注目させて指導を行いたい。

演奏時間は前奏曲が約7分半、第1幕が約23分、第2幕が約24分、第3幕が約38分で合計1時間33分ほどであり、「ラ・ボエーム」同様、幕ごとの上演時間が短く、その点で授業時間内で扱いやすいオペラ作品といえるだろう。

この作品の鑑賞にあたっては、特にライト・モティーフに注目させたい。前奏曲に含まれるライト・モティーフを教え、各場面にちりばめられた旋律を聴き取らせながら鑑賞をすすめることで、オペラの作曲法についての関心を高めさせることもできよう。

男の登場人物が1人だけで(魔女役をテノールが受け持つ場合はあるが)、男声による歌唱の魅力を伝える場面に乏しいという面はあるものの、よく知っている童話が色彩豊かな音楽になっていることで、オペラの表現力を感じさせるには最適といえる。

民謡を意識した(あるいは引用した)部分の旋律は、発声や歌唱の教材にふさわしい。

9. ま と め

オペラ作品は無数にあり、そこから中学生の得るであろう内容も果てしない。しかし、限られた中学校音楽科の授業の中で扱うからには、その効率や、「最終的に何をオペラから学ぶのか」といった視点は必要不可欠である。

上記6作品は、中学生の歌唱への関心を広げる可能性を多く含む作品として選んだが、授業で実際に扱う際には、それぞれの作品のどの部分に焦点を定めて指導するかを、指導者自身がはっきりと意識し、指導計画の作成に当たらなければならないだろう。

また、これら6作品のうち、杉町が実際に中学生に指導した作品は、「セヴィリアの理髪師」、「フィガロの結婚」とどまることは先に書いた。

今後は、生徒の実態や社会的な背景の変化などもふまえ、さまざまなオペラ作品の指導を試みたい。中学生とオペラの邂逅から、より豊かな感性を育てる授業方法を模索していきたいと願うものである。

参考文献

●書籍

- ・「中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—音楽編—」文部省、教育芸術社、1999
- ・「最新名曲解説全集」第18～20巻、音楽之友社編、音楽之友社、1980

●教科書

※以下の年度の文部科学省あるいは文部省の検定によるカッコ内に示した出版社の中学校音楽科教科書の「2・3年上」及び「2・3年下」または、「2年」及び「3年」の巻を参照した。

- ・平成17年度(教育芸術社・教育出版社)
- ・平成13年度(教育芸術社・教育出版社)
- ・平成8年度(教育芸術社・教育出版社)
- ・平成4年度(教育芸術社・教育出版社・音楽之友社)
- ・昭和61年度(教育芸術社・教育出版社・音楽之友社)
- ・昭和55年度(教育芸術社・教育出版社・音楽之友社)
- ・昭和52年度(教育芸術社・教育出版社・音楽之友社)
- ・昭和46年度(教育芸術社・教育出版社・音楽之友社・音楽教育図書)
- ・昭和43年度(教育芸術社・教育出版社・音楽之友社・

音楽教育図書)

- ・昭和40年度 (教育芸術社・教育出版社・音楽之友社・音楽教育図書・東京書籍)
- ・昭和36年度 (教育芸術社・教育出版社・音楽之友社・音楽教育図書・東京書籍・講談社・学校図書)
- ・昭和34年度 (二葉)
- ・昭和32年度 (教育芸術社・教育出版社・音楽之友社・大日本雄弁会講談社)
- ・昭和31年度 (教育出版社・東京書籍・二葉・教育図書)
- ・昭和30年度 (教育芸術社・音楽之友社)
- ・昭和29年度 (学校図書・二葉)
- ・昭和28年度 (教育芸術社・教育出版社・音楽之友社・

二葉・中教出版)

- ・昭和27年度 (音楽之友社・大日本雄弁会講談社)
- ・昭和25年度 (中教出版)
- ・昭和23年度 (春陽堂)

●インターネット

- ・「ドクター T の部屋 オペラの部屋」(<http://tc5810.fc2web.com/operanen>)

●紀要

- ・「オペラ作品の教材化について—生涯教育を視野に入れた音楽科の教材論」小原伸一 (宇都宮大学教育学部研究紀要 第54号第1部)